



原 英一 (著)
『〈徒弟〉たちのイギリス文学
——小説はいかに誕生したか』

Eiichi HARA,
Literature of Apprentices:
The Origin of the English Novel
(304 頁, 岩波書店, 2012 年 10 月,
本体価格 3,700 円)
ISBN: 9784000258616

(評) 廣野由美子
Yumiko HIRONO

「小説はいかに誕生したか」という本書の副題を目にしたとき、ただならぬ大きな構想のもとに書かれた本であることは、予想がついた。とはいえ、ディケンズ研究者の著書ならば、さぞや本の中身はディケンズでびっしり埋まっていることだろう——そういう評者の先入観は完全に覆された。本を開いて目次を見ると、そこにはディケンズの名前がいっさい出てこない。これが、まずは新鮮な驚きだった。そして「序章」を読むと意外にも、小説の起源に関する著者の考察の出発点となった小説家は、ディケンズと親近性のあるフィールディングでもスモレットでもなく、リチャードソンだったという。そして、第1章（「徒弟の登場」）から本格的に始まる本論では、小説史ならぬ「演劇史」が展開し、浅学の評者などは題名も聞いたことがないような芝居の名前が綿々と連ねられ、鮮烈な演劇の世界の只中に引きずり込まれることになる。

予想外続きのなかでも、とりわけ衝撃的だったのは、小説が演劇から生まれてきたとする著者の仮説である。小説の起源に関する研究が多々あるなかでも、これほど大胆な説は、評者の知るかぎり目にしたことがない。これは、文学研究における「ジャンル」についての通念を根本から覆す発想であるといっても過言ではないだろう。つまり、詩・演劇・小説は（それぞれ歩んで来た歴史に違いはあるものの）並立するジャンルであるとする従来の形式的捉え方を打ち破って、本書は、内容のつながりに重点を置いてジャンルの生成史を辿り、演劇のなかに小説が胚胎したというダイナミックな見方を提示するのである。

一般には、イギリスの近代小説の祖は、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』辺りとするのが定説である。ことに学生に向かってこれを説明するときなど、私（評者）は頭のなかにモヤモヤとした戸惑いを感じてきた。「も^っとも、このときを境目に突然小説が生まれたわけではなく、それ以前にも小説らしいものは書かれていたけれども……」と言葉を濁さざるをえず、あとは *The Pilgrim's Progress* 辺りに逃げ道を求めるしかなかった。「パニヤンの伝導書のなかには人間が生き生きと描かれていて、小説の萌芽が見られる」等々。しかし、むろんこれで説明がついたことにはならない。何か大きなギャップが、説明されないまま横たわっている、という感じはつねに拭えなかった。そういう意味では、本書は、隠された謎の真相を明かし、文学史のギャップを埋め、私のモヤモヤした疑問に答えてくれる啓蒙書でもあった。

本書でジャンルの概念の捉え方に劣らず斬新なのは、〈徒弟〉を切り口として文学史を横断するという方法である。〈徒弟〉は、本来、中世ヨーロッパのギルド制における階層を示す言葉で、日本人にとっては「弟子」や「丁稚」ほど馴染みはないものの、文学作品にかぎらずさまざまな場で、私たちは一般名詞としてこの言葉にしばしば出会う。しかし、それが文学史を形成するキーワードとして着目された例は、これまでにほとんどなかったのではないだろうか（たとえば文学分野で“*apprentice*”を含んだ書名を検索すると、ヒット数は多いものの、研究書はなかなか見当たらない）。

なぜ〈徒弟〉が文学用語となるのかを説明するには、まず、文学の基本概念についての著者の考え方を紹介することから始めなければならない。原氏は、文学とは「社会が抱える文化的問題の表現媒体としての機能を果たすもの」として位置づける。小説が誕生する以前、その機能を果たしていたのは演劇であり、それが小説へと受け渡された、というのが本書のシナリオの大筋である。それゆえ、著者によれば、イギリス小説とは「個人と社会との間に生じるさまざまな葛藤を精緻なリアリズムで描き出す文学」として定義づけられる。その「葛藤」の主役としてスポットライトを当てられたのが、ほかならぬ〈徒弟〉だというわけだ。

これは一見、複雑な議論である。しかし、第1章でホガースの版画シリーズ『勤勉と怠惰』（1747）の解説に引き込まれるうちに、〈徒弟〉は、私たちにとってにわかに大きな存在となる。中世から18世紀にかけての商業資本主義社会では、市民とは、ギルド構成員としての権利を享受できる商人のことで、市民になるためには親方の下で一定期間奉公しなければならなかった。その修行中の若者が〈徒弟〉であり、修行の過程で出世してゆく者と、反対に転落の道を辿る者に分かれる。前者の代表たる勤勉なグッドチャイルドと、後者の怠け者トム・アイドルは、最初は織機の作業場を描いた一枚の絵の中に収まっているが、プレート

が推移するごとに、二人の運命の上昇と下降の差は大きくかけ離れてゆく。しかし、アイドルの公開処刑とグッドチャイルドの市長就任パレードとをそれぞれ描いた最後の二枚のプレートから、「勤勉な徒弟と怠惰な徒弟の間には紙一重の差しかない」という恐るべきメッセージを、著者は読み解く。ここにはすでに「物語」が含まれていて、〈徒弟〉が近代人の代表で、近代における葛藤のメタファーでもあること、したがって、そこにはすでに「小説」の萌芽が息づいているということが、読者は早くも飲み込めるようになるのだ。

しかし、そこから一飛びに小説誕生へと先に進まないところが、本書のアプローチの稀有な特色である。逆に過去へと向かい、1642年の劇場閉鎖の前へ、ジェームズ朝からエリザベス朝へ、そしてようやく未来のジャンルである小説の影が消える16世紀前半にまで演劇史を遡ってゆく、という周到な「影探し」が開始されるのだ。その「影」の黎明期に、「市民たちと市民予備軍である徒弟たちを意識して創作され、実際に彼らの支持を受けていた多くの芝居が上演されていた」ことに着目して、著者が「市民劇」と呼ぶこれら一群の芝居を克明に分析することが、本論の骨子となる。

「出世する徒弟、墮ちる市民」と題する第2章では、版画『勤勉と怠惰』の市民劇版として、徒弟の両極的な物語が取り上げられる。その一例であるトマス・デッカー作『靴屋の祭日』(1600)は、貴族階級と市民階級の融和を二組のロマンスをとおして描いた作品であるが、その背後で、靴屋の親方サイモン・エアの出世物語がメイン・プロットを形成している。徒弟から身を起こし、事業に成功して、ギルドの代表者、市の参事となり、やがてロンドン市長にまで昇りつめたフォークロアの人物エアは、「出世する徒弟」の代表である。他方、出世のために抑圧される生命エネルギーが、性欲・暴力・狂気といった反文明的側面へと向かい、ついには犯罪者へと至った「墮ちる市民」の例としては、ロバート・ヤリントン作『二つの嘆かわしき悲劇』(1601)の主人公トマス・メリーが挙げられる。実在の人物をモデルとしたこの芝居は、平凡な市民が突如として凶悪な殺人犯に変貌するさまを、極限まで推し進めたリアリズムの手法で描いている。しかし本章でも、著者はたんに徒弟の二つの物語を例示するに留めず、それぞれの生き様が、ともに人間の本性に深く根差した相矛盾する衝動から生み出されたものであることを指摘し、近代人の置かれた状況——都市における「文明」と人間に内在する破壊的「自然」とがせめぎ合うさま——についての考察へと発展させる。そのせめぎ合いのなかに、演劇から小説へのジャンル転換をもたらし原動力が潜んでいたとする本書の主張は、説得力がある。しかし、ことにヤリントン作品における殺害や死体解体、処刑などの残酷な場面などに関して言うなら、それを舞台空間で演じて観客に見せる視覚メディアたる演劇と、文字によって表現する小説

との、ジャンルの差異も一方では感じられた。

第3章(「金と血と愛欲のゲーム」)においては、〈徒弟〉のもつ二面性のうち、「悪」の側面に関する考察がさらに推し進められ、悪の演劇的表現を追求した市民劇作家トマス・ミドルトンの作品群が取り上げられる。「シティ喜劇」(ロンドンを舞台として展開されるブラック・コメディ的な社会諷刺劇)というサブジャンルに属するものとしては、『いかれた世の中ですぞ、皆の衆』(1606)、『チープサイドの清らかな乙女』(1613)、『チェスのゲーム』(1624)などが例示され、市民の金銭欲・出世欲・上昇志向などが、性と絡み合いながら展開してゆくゲーム的プロットの型が分析される。他方、悲劇作品(著者はこれを「シティ悲劇」と呼ぶ)の例としては、『女よ、女に心せよ』(1621)や『チェインジリング』(1622)が挙げられ、そこに描かれた愛欲の反文明的獣性或狂気のさまが炙り出される。

第4章(「徒弟としての女」)で、〈徒弟〉の概念はさらに拡大され、複雑さを帯びてくる。たとえば、作者不詳『美しき女たちへの戒め』(1599)の主婦アンのように、不倫から夫殺しに走るタイプが「怠惰な徒弟」、トマス・ヘイウッド作『西国の美少女——第1部』(1604)の庶民の娘ベスのように、ビジネスに成功して出世してゆくタイプが「勤勉な徒弟」の、それぞれ女性版であることは、容易に頷ける。それに対して、第三の「理不尽な支配と抑圧にひたすら耐える」タイプは、よりメタファー的性質が強いようだ。女性は個人としてのアイデンティティを意識して主体性を守ろうとすると、男性の権力との衝突を免れないゆえに、「ジェンダーとしての徒弟性」を含んでいる、というのが著者の主張である。この第三の例として挙げられているのは、トマス・デッカー他共作『辛抱強いグリシルの楽しい喜劇』(1600)と、トマス・ヘイウッド作『エドワード四世——第1部・第2部』(1599)である。前者では、夫に対して絶対服従するグリシルが、後者では、国家権力に翻弄され迫害に耐えるジェインが、ひたすら忍従する女徒弟として位置づけられる。彼女たちの徹底的な受動性が「実は逆説的な自己肯定」なのだ——これが本書における最も難解なテーゼであるが、それは同時に、リチャードソンの「小説」へとつながる要をも成している。

第5章(「黒人奴隷の肉体」)に至って、ようやく「影」ならぬ本物の小説が登場してくるのだが、本書はなおその「瞬間」までの推移を、隙間なく埋めてゆく。清教徒革命(1642)の勃発とともに閉鎖された劇場が、王政復古(1660)によって復活したとき、劇場は特権的かつ閉鎖的なものへと変質し、市民劇は姿を消す。徒弟不在のこの舞台に新たに侵入してきたのが、ジェンダーとしての徒弟を内在させた「女」、具体的には「女優」と「女性劇作家」であり、彼女たちが男性中心主義文化を侵食して、新しいジャンルを生み出したというわけだ。女優

は、創作面で劣化した演劇を、その肉体的や演技によって活性化するうえで重要なエレメントであったとして、著者は、当時の花形女優たちの経歴のなかに「出世する徒弟」の変形を見出す。また、史上最初の女性職業作家とされるアフラ・ペインが、男性社会に媚を売るような創作態度で、はじめは演劇を書き、当時流行しつつあった散文ロマンスの世界に徐々に踏み込んでいった過程を辿りながら、そこにもまた、「女性性=徒弟性」を見出す——といったように、本書の議論の一貫性は徹底している。

さて、この辺りまで来るとさすがに——いまだ啓蒙されていないことを暴露してしまうことになるかもしれないが——小説専門の身としては、「小説」の議論へと移る瞬間が待ち遠しい。著者が「娼婦的作家」と呼ぶペインが最後に書いた、驚くべき散文物語『オルノーコ』(1688)に至ったとき、私たちはついに新しいジャンル誕生の「瞬間」を目の当たりにする。この作品は、黒人奴隷の叛乱という異例の内容を含んだ物語であるが、黒人が、絶対的隷属の立場に置かれ、その肉体が商品化された存在であるという点で、商業資本主義システムのなかで女性と類似した立場にあることに着目し、著者はそこに人種・ジェンダーを超えた〈徒弟〉のメタファーを見出す。さらに、この作品の後半で、いかに凄惨なことが書かれているか——それはもはや小説でしか表現できないものである——を提示した部分は、本書の圧巻である。

小説は、「近代社会のシステムに捕らわれた人間の苦悩と葛藤を十全に表現する可能性を潜在させた新しいメディア」であるという再定義に基づいて、第6章(「美德の不幸、悪徳の栄え」)では、リチャードソンの小説の再読が試みられる。この作家自身のグッドチャイルド的イメージ——フィールディングを触発してパロディを書かせた生真面目な徒弟的作家だという先入観——に左右されて、私たちはつい彼の長大な小説を、こぢんまりと捉えがちである。しかし、美德を盾として自分の性を資本主義システムのなかに位置づけることを拒否する『パミラ』、男性による支配体制に反逆しつつ苦悩を甘受する『クラリッサ』の女主人公たちを描いた両作品の内部に、「サドを凌駕するほど巨大な、反文明の、叛乱のテーマがある」ことを、著者は指摘する。こうして、近代資本主義社会における〈女徒弟〉たちの物語として再評価されるとき、リチャードソンの小説はいっそう深さを増して、私たちの眼前に立ち現れるのである。

以上のように徒弟の物語の系譜を辿った本書は、「終章」に至って、西欧文明を批判してその対極にあるものを志向した20世紀作家E.M. フォースターの作品をもって、〈徒弟〉を退場させる。ここで何か物足りなさを感じてしまうのは、無い物ねだりというものだろうか？ しかし、「あとがき」を読んでそれは満足感へと変わった。本書の表題を目にしたときから、評者の脳裏に出没し続けていた

『大いなる遺産』のピップが、ようやく最後に姿を現したからである。村の鍛冶屋の徒弟から都会のジェントルマンへと出世しながら、内に抑圧感と欲望、そして犯罪の影を抱え込んだピップ。「イギリス・ルネサンス期演劇の中で徒弟に出逢ったとき、私はピップに再会したような思いであった」と原氏は語る。これを読んで、やはり原動力はディケンズであったのでは、と勝手ながら想像した。少なくとも、本書において扱われている芝居が織りなす「近代資本主義社会という織物」に、ディケンズ作品が太い糸として組み込まれていることは、確かであろう。

本書の構想の成り立ちは、著者がリチャードソンとの出会いをきっかけに、20年以上にわたって200を超えるイギリス演劇を読み込んだ経験が基になっているという。専門領域内に閉じこもっていたのでは、到底書けないような大著である。それと同時に、単一の著者によって大部分が書き下ろされた本書では、緻密な一貫性と勢いのよさという強みが十全に発揮されている。たとえ脇道と見えても自身の着眼にこだわり、粘り強く没頭すれば、やがては本通りとつながって豊かに実を結ぶ——そういう励ましを与えてくれる本としても、一学徒(研究者もまた徒弟であることは言うまでもない)としては感慨深かった。